續俳家奇人談　上

新宮城書
へ 5
2766
4

天保壬辰秋鐫

蓬廬青々山人著

八朶園寥松老人補校

續俳家奇人談

此書ハ往古より近代の俳諧名家蓼太白雄蘭更暁台存義等に
至るまで一人としてもらさずその伝を詳にして第一奇とよぶべき俳諧逸
話且家々の画かける蕉翁十哲の像并鬼貫支考千代尼など俳家の書
画縮図を加へて載られば風流の君子必ず座右におかではかなはざる随筆也

藤野潔氏寄贈

昔句に竹窓云く一おのづからめぐるときそ此道の士
あり十余の奇行なるを書集めて其名
寰宇山人の刊する所おほしく開けるのあらはるゝ
畸人の目を号け擬して俳家奇人譚と名付く
るの編也文明の代の諸名家より宝暦あたりの
此道の士の事を載る其譚おのゝ一家をなして
すこぶる俳の趣を形し如しきはいふべきならん
宜まる所あるは然る

藤野潔氏遺愛之記

あらんは俳諧する人あまたある中にも奇偉なる行
ふ筆をとりて書置しも情ありし事ども伝へまほしく
その名ハ世にもしられずして失せ果てなむ
事を憂へつゝよく探りもとめて書あつめ其ハ前に
上梓せし事に雖諸家の序ありさ
其の後にも件の人々を録させてし
続て一まきにもあらましと思ひ立けるに翁
此らきみる人俳諧のうちいと心を留め給ふもあまた

諸翁の中にも白雄と蓼太汐の二譚ハおのれかまゝさ
しくみたる事久しきやおのれ諸人も話なきも書補ひつ
是を此編の中にもらしたるも出すも都合に泄さぬものハ
此三編の末に出す附に筆の力を知りて必ず載はし
ものと先に二編の世におこなはれしを備にあまりて
よってしかすがに事に形しむ

大年序八朶

附言

一 道に古今の変ありて俳諧も亦しかり これ此書初編に続きて古人の俳風奇行を挙ぐ 読まん人もすべからく古を遡りて後今の俳諧をかうがふべし 温故知新のをしへもかゝるをとや

一 前編ゆゑありて延引し 先人の寂後忌に趣足しく 卒は世に行はるゝ田氏捨子の一譜を漏せり 今これを加ふ 又はた大雅堂のことは近世畸人伝に載たりといへども今存生なる老人佐玄潮なる者の物語れるに俳諧の風流をのせぬひとつ其事の欠たるを補ふ

一 宴に撰び集る所は古俳客の随筆雑記句集の類又他書にあぐる俳諧その伝聞のくはしきは其家々に就て書

記行などゝいふもの多し猶古書画を摸写せしめまた考へを加ふることもさへあれど本文を助んとするのみなれば人これをかりひらきまく

蓬廬閑人書きしるす

（蔵書印）

續俳家奇人談總目録

上巻

一　宗長法師
一　末吉道節
一　宮河松堅
一　乾貞恕
一　堀江林鴻
一　志村無倫
一　高井立志
一　肖柏法師
一　馬淵宗畔
一　藤谷貞兼
一　吟花堂晩山
一　岸本調和
一　大野秀和
一　溝口竹亭

一高村和及
一四時堂其諺
一五井塘雨
一山本子英
一井阪春清
一田氏捨女　附盤桂禪師
一松倉嵐蘭
一岡村不卜

一中巻

一宮司能順
一木因坊
一天野桃隣　附瀬尾桃翁
一逸人二川
一風士梅貞
一瀧方山
一小澤卜尺
一無腸處士
一竹下東順
一従者吼雲
一騷客凡兆
一雅人杜國
一山本荷兮
一宮崎荊口　附此筋　千川
一瞽翁木節
一僧李由
一磨工牧童
一瓢水居士
一白馬散人
一稲津祇空
一長谷部柳居
一大雅堂　附妻玉瀾
一泉石老人

一下巻

一白井鳥醉　一山口黒路
一紫子春來　一慶紀逸
一俳宗祇徳　一西島妻
一皐月平砂　一中村歗石
一越谷吾山　一龍門曉臺
一吾竹坊　一玄武坊
一谷口蕪村　一闌更居士
一渡邊岱青　一井上士朗
一川上不白　一寺町百菴
一馬塲存義　一春秋庵白雄
一大島蓼太

通計六十有六談

烏帽子やを
ちほしつきて
みをりふれ
月

蕪村

其角

山村蔵

立出てうしろあゆみや秋の暮

嵐雪

片枝に脈やかよひて梅の花

東花坊

欄杆に登てや菜れ日影ぼし

許六

木枯乃地にも落さぬしぐれ哉

去来

飛込と
まつり都の
時鳥

丈草

此ほど垣の
結めやはつし
くれ

野坡

散時の心やすさよ
罌粟の花

越人

ゆふ風に伸ふさ
あけてたおる月

北枝

海山の鳥啼たつる雪吹かな 拾風

鳳凰都於東山雅仙菴 書

續俳家奇人談巻上

故句當 竹内玄玄一 遺編

宗長法師

宗長法師ハ駿河国島田駅の鍛冶何某が子也。今川義忠其幼けなきより才あるを愛し左右に勤仕せしむ。事変ありて年あり。或時宗祇ニ謁し連歌の事を問るに一を聞て十を悟る。遂ニ出家して名を改め駅中に草庵を結ぶこと十八ばかり。其法を書捨院に伝ひ後は紫野一休和尚に参禅ありといふ。明應中師範勅を受て新撰菟玖波集をえらばるゝ時法師も連歌廿八句をいるといへども何れの故にかしらず。行脚して伊勢国関地蔵といふ所に宿り亭中乃立花萎りけれバ立花乃かハりをさせられて寐ね夜の

師没しゝ後同遊打寄て天下花の本の宗匠たるべしと勧め
けるに思ひも寄ぬことゝ一向に承合ぬ故におして奏聞を経
けるまゝ座ありて其跡をつぐべしと仰を下し給ひて名誉
なりしとぞ或とし紫野大徳寺修理総堂おとろへて廃頽
長も真珠庵を建立けるに山門いまだ成らざるに於て
其修理の費が一を助んと己が秘蔵する定家真筆の源
氏物語を鬻て六十貫文を寄附せしとぞ又永正元年今
川家の被官斎藤安元其居を泉谷に移さしむ柴屋軒
と自號し庭前あかに山谷を見座りて四時の興絶ることなし
口号「山桜いかりふ色そふ庭かな翌年幾千世も志がれと
筧添うて竹を植て「幾若葉は庭し初見の其竹より
からも客人の賀を担て附合ありしを冠此の句とハ成みくるか

大永の末の年其竹を杖にきりて今川君に奉るとておの迄
う八十とせの齢なれバにや「此の杖ハ誰まハあらじ君と我
八十路の坂をこゆるためしさ然るに一節切を吹て古謡を
ありを多く古竹をのそわそびて平生の楽みとハなし
ける時享禄五年三月八十五歳にして物故せり此僧
連歌の蘊奥を極てことさまえたるが中に「年もたゆく
荒き浪風を漕見ぐるとハ「ゆきを見るも又物語
りの種かな」と附句しけり按ずるに古今の戀も大舟の
ゆくのたゆたとよめり新撰集にゆきを見るも出げき湊哉
と見られり法師あれば紙て附くる事知べしゆきとハ舟の
阿加のことにて由文字出べきゆや　附録ニ委しくあるれ　何進バ古人も
聞知る其の廣れハ来由なき在業ハ世く出ばるとや

肖柏法師

肖柏法師ハ具平親王の遠孫にして世自然斎宗祇より和歌連哥の道統をうけてみづから牡丹花と称れ時に心敬宗祇の両僧世を去て毎會争論たえざりしより文亀二年勅を蒙りて新式今案を述して其法を行ぐひ連俳此後業とするを是によらざるハなし「春咲ぬ花のあとかや涼風艸といへバ連俳に牡丹を初夏につゞきたるを是此の叟が發明によりて枕とし禁理法令十六夜の月出て「宵に置てみん秋や幾世秋の月或年霧して「宵に見るやよそのぞみの秋の雲と世の人只に其角の句のことをいひて肖柏ありしをおもひだすに桃園法師の雨乞の句ハ東づまり〈附録に委し〉老に番として攝の池田に移れる其居を夢庵と名く庭中に四時の草花をうゑ其軒に題して弄花ともいひて性酒を好み香を焼て花をめでしむ其道を三愛といふ自ら紀ありて後ゆゑありて泉南に移る大永七年四月四日八十六歳にして死去り南嶺子がいふ先人のことし老人の遺書とて秘事など遺したる者其袋にいへるとなんその奥に四月廿日死すとありしぞ恐らくは牡丹花の名残をかりて偽作せしものなるべしと

末吉道節

末吉道節ハ津の国平野の人貞徳門に入て俳諧の上手なりしをある時「雪しゐしバ雪女ゆやなうなりと彼成就僧都の句より雪女といふ替なしたる働きおもふべし是より道節の名をひろめ平野の道節と八称せられたり寛永の頃江戸より来て

しかしく往れど不運にして用ひられず折からの災ひに罹りて家財を失ひ年の暮にせまりて洛に悩める時節元旦に「一冗義はみのとしいはふわざにせしが宿なく身の上に成るもしへ今はかり时に兼葭三年之

馬淵宗畔

る淵宗畔初名重治京都に生り人と成て正直にして誠に律かふ事の忠誠之道時にしたがひて俳諧の点料沈失一両之けるが貞徳に讃えられて云く其かみ紹巴連歌の点料廿四字と定りしときけ世も今より沈軸と銀軸に誘ふまへと沈む洪り優に銀壱匁の料に定む式とし立圃も倚て例を違て銀壱匁と定る畔またまに以て圃にして定むかくれおもし又一銭目ましたまへと以後遂に永銭目となれり哉の愿校京に於ことにしく知べし「深法けふく花盛や移ゆ桔梗四「七賢が梅けむ花ぞ藪つぎて兼葭四年乃春風呂に入りて中風おもり遂に黄泉の客となりね

宮河松堅

六角通八道柯居士と称し京大仏堂の南先に貞徳の旧跡に家ありし旅宿に村墨庵の号あり後松堅と改名せり「家乗に育ちて歌を好りし「洗濯の盥に月も浮かし物哉の淵雅なる事見るべし始め幼き时に地に独吟子句ありや答くいたく有「ほのぐに咲く松梅や垣のかげにかさねひろく身子と為りて後世の世を得るの時としやり處く二十木瀬之也にいかしけうびしこと是のを修習し素より和歌をよく承し法世に門人多しといふ業遂に痰嗜し没りに

のぞみて辞世の句を乞むとするに起あがりて人なくし
て料紙をさしむけしめ臥ながら筆を拈て煩て云く「誠
まで筆を離さん行方に数ならずよりも我ぞはかなき姫ぐ
と捨て忽ち瞑ぐ時ハ享保十一年二月廿三日夜半也

藤谷貞兼

藤谷貞好ハ山城の人後に浮気たる偉を避て貞兼と改めたり
句に植翁と称し作雲軒と号す「田付てや句ひを移し
道の中「秋も日のいらくありし庵いとなみ人も皆今流が門
子なりく貞の字を犯友なる人あれを称る家に移て今流
誘引して貞流に見えしむ元禄十四年十月死す世を辞る
る句「月ハみこぼらや二十日出来迎

乾貞恕

乾貞恕ハ越の敦賀の人いづれ年にや江州大津に来り住
てより貞室の門庭に入れり「敷香や深山おろし残さずよ
古名一年ある人の「遠くハゆうぐ今朝の旅人とてみ
「花ばこふいきり立する馬の嚢と附句して大津の馬乃
くそとりふ運者あるハ鞍を抱て笑ま堪より一説ま
宝が門子多しといへども流ゆづるべき者なし其の人々
花のおそあるべしといふ

吟花堂晩山

晩山ハ京師の人也号ハ祖白の隠父子に交りく言葉にあき
らて俳諧ハ松堅より得て吟花の二字をとりて堂号とせり
「法師もやり十日の前に降はじめ「うき古との道て来る
なり秋の蝶「赤うらん花の名さや庵がしし「新緑や活る

此代の名れおと此人殊に手綱の跡ましハ俳諧山寺府ま
答へし額物語とせるハよく菱助が取りを解き明ふに
しるしたりとまきし擬ありし其比の紀州ともなんべし世俗
去時の吟「世なれて居や背ハさなからハせの艸老波め

堀江林鴻

堀江林鴻ハ似船の門人にしてはじめ風雲子と称し調月堂と号し
「ほろよしと花のむらむかきつばた」といふ句にてしられたり又
此ころ俳諧家譜にいふ鴻か集る所の京羽二重をみるに其
此一時の俳家に手出を加へてあれを探せり唯陸源のさなき
り憤ることを思し夜ま永代記をあらはして鴻を譏る其の云
紫に宗匠二代に輝なる林鴻の徳それをおのれに比すハ過ぎたり
とされた此子宗の林学士を慕ひ堂号をそのかの潤金門
に富める詩よりとられバ也

岸本調和

岸本調和ハ石見の人なりと安静に伝まなびて壺瓢軒と号し
后に去砕ともいふ寛永の比江戸呉服町に来り住り「其日
や達广大師も尻りぐへ「雛桶や伊勢男の瓮の捨ところも「楚
なりびぞ夜の据ろさん「遠思の二字やよおとの茉莉とに正統
又年比を去迄まで艸といふ出を綴りたし「おの一句流後判
なし本かりし聲とにぎりし時あたりて死せり

志村無倫　附 倫里 未川

志村無倫ハ越後国の人江戸に出て吟叟の門裏にあそぶ拾翠軒
后に雪堂とも号し「ひとらせのむびゆうし萩かな「包まれ
て水そのびくり遂りる 或ハ野坡が句とし未知何是 享保二年二月死し辞世「ほハ

雪月花一　神鏡之　無倫
白圭一　濟斉亦
不知夜一　望月之
有明二　朏五
長二●五
黄一　蓮一　鸝
重二　金菊一　贊
雪玉二　銀梅二
紫藤二　紅葉七

野梅
江南梅
東閣詩情

書子昊

一洼

此らハ水より水へゆきされどその門人是立倫里流をつぎ穂紫軒と称す倫里死して其子来川弟子立川水軒と号し家にいたりて宗流をたてたり「花も穂も萬紫よりぞ恵み去倫里

「売るも飲む儀ぞ一口にみつぎて来川

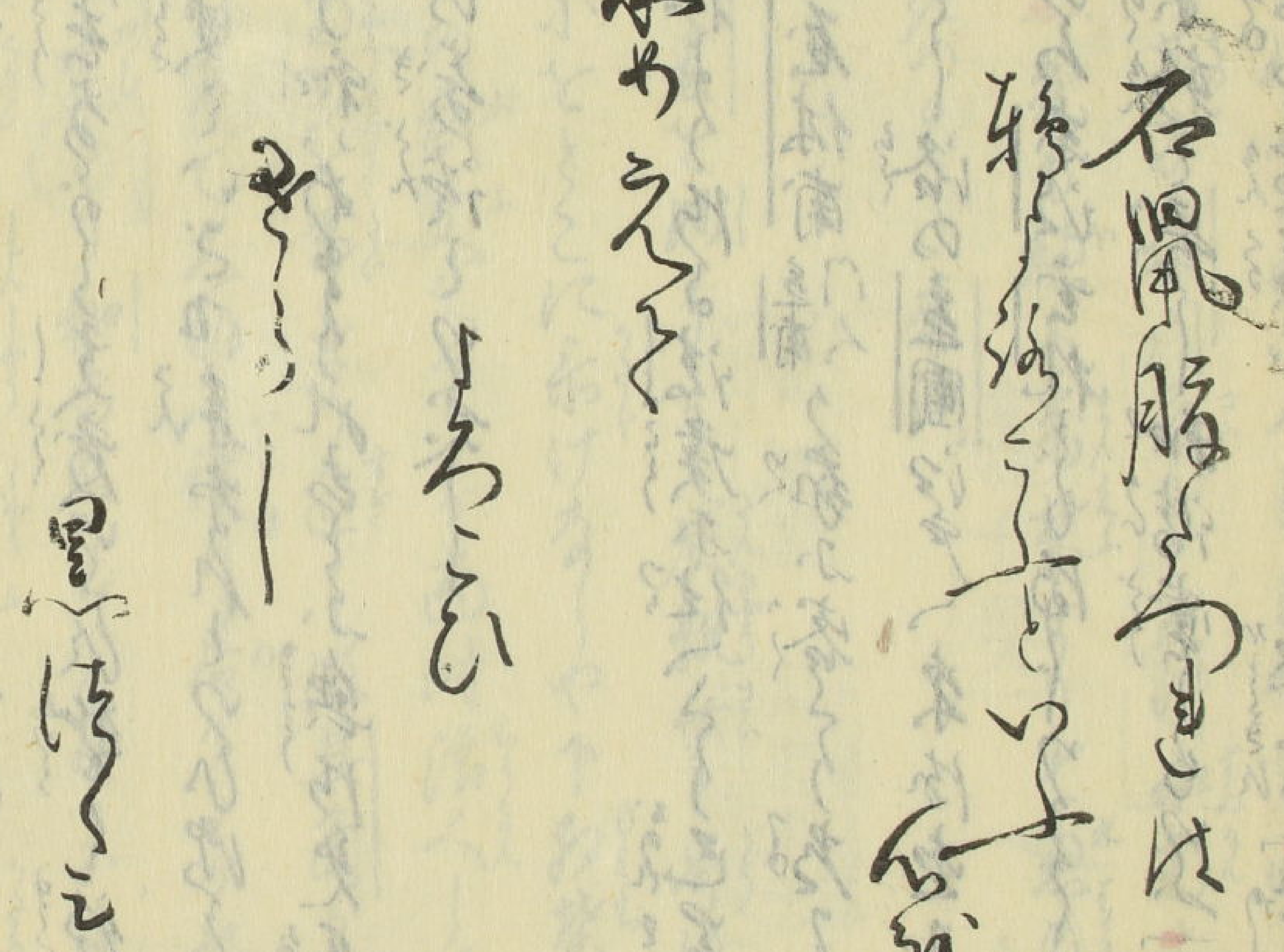
大野秀和

大野秀和ハ江戸の人俳諧を好しく炭瓢斎と号す「獨居く隣りなくしや窓の梅「小をとこに示けなしや下野紫はじめ何某侯に仕へて豪雄の武士なるが当時浪人してもむかしを忘れぬ熱勢なくて刀を帯をり色し其角が戒てたつ己が真を唱り笑へると算て大ひに憤り居るがおかしき風流上手なく不図ゆき逢たり和歌を合ひけるへ其汝ぞかしのあと申せし也われ奇怪く思ひ者に侍身をすと刀れ讃の冬

手をうけたり角あへて此る事申しけれハ汝奥恨に思ふなら抜くいで相手に孫狼ん去なゞる文段いて暫く待れよと相引あげて書筋を腰に挟こいざ立来なれといひ演て跡をも見ずして延出しけり秀和ハあきれ去ちに興してその長追せざしけ上ぬとなん一時の奇談といふべし

高井立志

高井氏ハ江戸の人先祖より此る諸侯に仕へたり己が家の事しひより俳諧を好みて橋屋休甫立甫門人が家に寄たり者なり俳諧を去て此て在中に戒とし洛の立圃江戸へ来りて此地で弟子とし成て立志といふその去に来此去れども伴じうりて遂に俳去を法りこうや松樂軒と号し和諧堂ともいふ「鶯尺く鈎挽家の小米花「淀京や喧嘩に出る郭公「芦れ屋乃



萬屋得二所蔵縮圖

このしゆりこむ癖ありて「我手くびハおそげぬ火鉢ありて寛永中に殺れし僧は先京に於びし此図水が「中く小さきかりけるを惜れ口とせるより「何ゆゑハ名残よぶ虫声とも附らるゝが遂に一巻を綴りて籾枝折と題名せり是に序あり其名大而其體小者立志法師と甚小男なるも世に大名なりしるとぞ知也し

溝口竹亭

溝口竹亭ハ常矩の門人なりしが後に和及竹翁等を友としよしおのれ此遊びの文房を携へて終日庭園の隅地に於ふ坐して吟し歩しくも詠じ時ハ句のいでけるハなし「掛網り尾鰭めもなり菜細工「燵子にて律まで巳が好むつき「ろふの月影ときくそ眠とある「年忘れ泛きき落しく嘲りけり元禄年に死去り慈所の此持多巻あって世にもあまたなる今の人乃知る所也

高村和及

高村和及ハ丈田を号し常長を以て掛しく京に住て比洛西壬生村に幽棲し露吸庵虫唱法師と自号ス「行ねどものちや山なし子就「くゞゝと二日にたりぬ去年を更「人夢は庵のなき秋の夕べありて庭のむしろと「長き夜や来ぬ人すよるむ提の数あるしの袖に「だゞしやうすみそれゆかし二本おも凌冬不凋春再回青とせる序文をふして云おもせていこえんぐたし元禄五年に殺れ辞世「我とても四十四年花乃あけぼのかな

四時堂其諺

玄張ハ京師にあそびて云水乃山鹿石髯と時を同ふしてつね
に交游四時堂と号す「芦田夜の水ぬるみゆる朝日哉「虫払ふ
の句くハ磯獺堂のかたはらにひそめて武の浅く秘すにきこへけり
勢ひにのせて其黨をそだてしるしもえて讀遂に帰りこむる
事ありし門人共ぞりて去れど怨りはまくて詠むれど居然
として哀れなれども其度量知ね廃しその座右にえらび置
こもりし滑稽雑談廿四巻四季の事実を纂て其學和漢に
渉まり古今俳諧季寄れせ多しとはいへども此世の志の書
老なしとはいふべきにいつけれぞ知る人なきこそ残

五井塘雨

塘雨ハ京都の人号を五井と云ふ俳諧ハ其傚ぐまりと知ことなし
性猿を好むの癖ありく常に門戸を鎖しつゝ遂に諸國
行脚の記を著して笈埃随筆十二巻と名く俳容の日記志の書
より大なるハなく文学博く宏識之その記にかて温かに見飽
まつぐ合ひ襟居せず老ハ住く俳の有るも農民の辛苦と
あるく其変を思ハばこそんや彼季伸にかゝらむかりし也く
「極しより四くの初いま稲の露まくさ云く杜鵑花初音ハ
養より聴く定親朝臣れろう「わとゝぎすれのひもとけば養
鳴ハありしぞ待ちて初音きゝつる万葉に秋郭公と「時鳥
おもきて小野の秋風に萩咲ね水や夢見こすしきと添を
引て「志慕細し小萩が本のほとゝぎす

山本子英

山本子英ハ勢州松阪の人加友がつ子之いづ述のもしにうつりとせ
けん江戸ハ下て浅草なるりに住居せしが晩年業をおへ本

底訳に移りて正徳中に死せりと聞えたる句「白魚は戸田のもとりや杜宇「ありし木のもとよく堂守はねるまじきよ治源のいふ白魚君句奥の須賀河翁が一ノ木戸に入るの何なるをかしや英がいなみしを和して入句しけるを後ぞ迷ひ怨ある聞て翁のひつらく庭がて人々も我も死ぬるなれバ各々のうらむる筆紫の陰まで栄ぶべしと嘯て泣きぬ今翁が風雅を感じたる此句を拾ふと丈翁翁去の句接唱へて治源涕て甚云を流ぐ是翁風雅の実をつくるものとやいはむ

井阪春清

井阪春清ハもと江戸の錫商にて生る孤にて己が業をすてて医を変を得るハよけれども幾程もなく次郎左衛門春清と名乗をいかめしく武器をうばりて兵術の師くと自称ハ嘗て立圃に倣ひて頗る俳才あり「夜陰人や菜根を食む嵐雪「詩にまける人の心や花俳を吉田定時が蕪句與にの時巻頭にえらび迷才を傳へしを立てりとや後まで医すかしをなり剃髪して名を玄春と改め小八町堀に住て移かしハ俳道とも投けし蕉庭回来の秋鉛座町に別宅をかまへ井坂留雲翁と大ひする標札をかけし花英を尽して奴婢多く抱へ饗て時の医の上手なりと一時世の人を欺く金銭かのれが楼落より此恩を忘れて訪ゆまにいひなしける夜つひに汁ぶれて落ちて迷ふりや老におよべる年は薦に「なうれ終りしに津るすや老のむざなど迷狼せしが程なく死きり

田氏捨女　附 盤珪禅師

捨子は丹波の国柏原田氏の女なり少より風流の志ふかし年ゆ六歳の冬「雪の朝二の字〳〵の下駄の跡されバ一年庵にあそびきたりしより「萱原におしや捨かく露の玉といへる詠たりけりし事もありし始め季吟法師に従て和歌をよくし俳諧は友ありて後松堅によるといふ「雑煮ぞや千代の数かく花がつお「うき中に別れし雪間は嫁菜かな「日ぐらしや汲てゝ重ても蕎る日ハ身下のちからを「桑は穂やみハ数ならね女郎花はつちの妻宗族へ嫁して後ちなく孀となる後ち髪けづりて妙融といふ歩りし以後古律をすさびしも老て盤珪禅師の法つかに入れり志ふかしより草庵を播州網干の里に結びて不徹庵と号ス元禄十一年八月その地に寂ス歳六十八謚して嶺雲貞閑禅尼と呼ぶ田氏にのこれる自詠に「秋風の吹来るかたに糸柳ちり行ほそくも菊は夕べうちに是雑髪の時のことなるべし後の人辞世とおもへる誤らくは非なりけむ

播磨の盤珪禅師は元禄年間の人にして其法徳世にかゞやく遷化の後勅せられて大法正眼国師と謚られ給ふ仏道修行の役にいと臼挽歌廿一首を詠せられ今世に流布る所え又絶句あり「草よ木よ海に示れしきの露と是悟道発明の一詠なるべし

松倉嵐蘭

松倉嵐蘭は板倉家の武士一般君といへるに用ひられ進退遂に仕を致して浅草のほとりに隠る蕉門の風容に「徐々く

と安くも云りつのくけ「おく孫こえぬ花人の影や相撲とり
「小夜時雨濡てはいる傘の音「子や泣ん其子の母も蚊の食ん
おれ蕉翁の歎より総て文字をくて意足調成无為韜鈔
後年月のふれかに獨余に携び帰洛病て殁せり蕉翁亡かた
めに述懐作る其略よいて金華を樽はして敢て撓かざるは
士の志く抛ちた文質備はらざるをりて君子の切とし嵐蘭は
義を骨として實を腸とし老荘を魂として風雅を肺肝
の中にあそばしむ年とちかむ年十あまり九とせふけるが此
三年バかりおつかへ官を辞して云云老母を養ひ稚子を保
ぐしてしくいまご世波ふくじよふされども栄辱の罟りて
居て云云おとし仲秋中の三日由井金沢の浪枕す此夜
添ふとて獨余に杖をむきそくるさくより色ち悪く云云おな

じき廿七日の夜七十年に先達七暴の稚子に思ひを残そ
いかなご悩むべき齢ひの八十年なさにたらずして云云色つる睦月
ばかりは稚子が手紙ありて年が草庵に来て彼に名附させん
べかよしとのふ玉戒大巣の眼にしうたがひし三戒は一字残
はみて嵐戒とは名づく其悦び家色いま目のあたり残さら
に生る時むつましかつねとぶたなりてぞ人はと思ばるるに
偲しく父の如く子のおとく手れ如く足の如く事はいひ
別述むかひる伴の愁の袂に結れふ述して枕も浮ねそうり
之筆をとりて思ひをのべむとはるかに木憑そのすくいへんとはる
に猶あさかりて唯かしまづきにかりて文への生にむかふ
のみ「秋風まだれて繋き葉の紋

岡村不卜

是村不卜は未得の門人江戸堀江町に住みて一柳軒と号し
「梅飛して痺いとはじ君代の春」物好おく男ばかりの田
植かな「蓬は風にちぎれて道とも」蹉跎元禄四年に死去り
此老ならびに續此原を著はし其叙文に名をせむとせし先の向乃圖
を俳諧の根を葉のよりて心ありし今續此原つぎとうし
此巻には其ありし此去と筆紙あえせて武蔵野のふる記友
ぶち語の何がしに判させて人ごとも多く此咒我も楽しむ
あらくはなりぬ云云その中に撰左持「撰ある添生又日は忘返
まじ其角右「そぼ娘るや狐傘けしき庭まであらぬ不卜
素堂老人の判に左右ともに驚し生田の哉平為をわら
ばと古志と紙冷じて筆をけしたくれを嫁掃左一何ゆさみ
行くわそびむ嫁拂ひ挙句右勝「嫁はうちで古は弛でこ紀仍
不卜蕉翁判に曰前句滑稽の實を失はず感心まれがるく傳
れども紀仍とゆひし句のいきおひ猶まされて聞え後
述ば勝とす是古人歌合の評になぞらひし其頃の風流な
る逸し

續俳家奇人談巻上終